様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６２８４０７０

研究課題名（和文）アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証

研究課題名（英文）Determining Academic Japanese Language Achievement Standards and Verifying Validity

研究代表者
藤森　弘子（FUJIMORI, HIROKO）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：５０２８２７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,600,000円

研究成果の概要（和文）：アカデミック日本語能力を示す指標として「アカデミック日本語Can-doリスト(AJ Can-doリスト)」を策定するために、レベル別・技能別のCan-do記述文の妥当性の検証を行った。まず、国内外の日本語教員に対して並べ替え調査を行い、記述文がそのレベルの行動目標及び細目を段階的・連続的に示しているかという一貫性の視点から妥当性を検証した。次に、本学の日本語プログラムの学習者に対して、can-do自己評価を実施し、can-do記述文が学習者の各能力の段階的な向上を示しているかどうかについて統計を用いて検証した。3つ目に学習者の作文などの成果物を収集し、学習成果の目安を可視化できるようにした。

研究成果の概要（英文）：In order to determine the Academic Japanese Language Achievement Standards, we verified the following areas of research.(1)Verifying the validity of items on the Can-do Lists (Listening, Reading, Spoken Production, Spoken Interaction, Writing) through re-ordering questionnaires put to Japanese language instructors (2)Verifying the validity of items on the Can-do Lists through self-evaluation by Japanese language learners (3)Creating model evaluation indicators for Academic Japanese language based on university questionnaires administrated at domestic and overseas institutionsstatistical analyses of the data were performed. I engaged in verifying the validity of the Can-do Lists that focus on oral proficiency, i.e. monologues and dialogues. Outcomes by the students of JLPTUFS made visible and evaluation samples were analyzed based on the Can-do Lists using essays, speeches, recorded or videotaped dialogues, etc., with permission from students.

研究分野：日本語教育学

キーワード：アカデミック日本語能力　言語能力評価　行動能力評価　can-do記述文　アーティキュレーション　言語教育法　JFスタンダード　CEFR

１．研究開始当初の背景

文部科学省は、日本を世界により開かれた国として、人や物資、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020 年を目途に留学生受入れ 30 万人を目指す施策を打ち出している。そのため国境を越えた大学間学術協定の締結や学生交流企画が増加し、日本の大学機関で学ぶ学習者数がますます増えると予測される。この施策では、留学生への質の高い教育の保証がなされなければならない。そのためには大学の勉学に必要な「アカデミック日本語能力」の習得が必須であり、交流や留学による人の移動が拡大化する今日、その能力を客観的に示す、大学間を越えた共通評価基準が必要となる。

欧州では、EU 統合という動きの中で、現代語教育システムの統一的観点を構築することが求められ、そのために言語教育の整備・統合の実現化へ向けて、「ヨーロッパ共通参照枠（以下「CEFR」）」が誕生している。一方、日本の国際交流基金も CEFR を参照し、主に海外の日本語学習者に対して「JF スタンダード」を開発している。しかし、前者は欧州言語間の移動を主としており、後者は日本語学習者全般にあてはまるような広範囲の概念であり、大学で必要な日本語力すなわち「アカデミック日本語能力」に特化したものではない。

すでに日本の英語教育においては、小池生夫他（基盤研究(A)2004－2007 年）、投野由紀夫他（基盤研究(A)2008-2011 年）が記述文の妥当性の検証を行い、その研究成果に基づき、英語到達度指標「CEFR-J」が公開されているが、日本語教育においては未だなされていない。

２．研究の目的

21 世紀はグローバル化の時代であり、日本の高等教育においても「グローバル人材養成」は喫緊の課題である。その戦略的な受入施策として、留学生 30 万人計画のもと、質の高い外国人留学生の確保が重要な課題であり、高度な日本語力、即ちアカデミック日本語能力を向上させ、それを保証する方策が求められている。本研究の目的は、学習者が日本語を使って何ができるかが明示されている、can-do 記述文によるアカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証にある。そのため、国内外の大学間ネットワークを活用して、客観的な能力評価とスムーズな教育の連続及び単位互換が行えるよう、本 AJ can-do リストが共通評価指標として機能するための実証的な検証を行い、利用者のニーズに対応するため、積極的に研究成果を広く社会に還元する。

学術日本語能力を示す共通評価指標として「アカデミック日本語 Can-do リスト」を策定するために、Can-do 記述文の妥当性を図る。そのために、(1)日本語教員による Can-do 記述文の並べ替え調査、(2)各レベルの日本語学習者による Can-do 記述文の自己評価、(3)学習者の産出物による指標の目安の可視化、という 3 項目を調査研究の目的とした。

３．研究の方法

(1) 日本語教員への並べ替え調査による can-do リストの妥当性の検証については、レベル別にランダムに並べた各 Can-do 目標と細目文を国内外の日本語教員に対して、並べ替えてもらった。その結果を集計し、カッパ係数による一致度をみた。

① 実施時期：2014 年 9 月～2016 年 3 月
②調査対象：日本国内の大学機関の日本語教員 56 名 海外の大学機関の日本語教員 42 名 計 98 名
③調査方法：技能別に、レベル別の同リスト項目の紙シートをランダムにしたものを渡して、初級 1 から超級まで順番に並べ替えてもらった。また、記述文がレベルを判定する手がかりになっていると思われる項目には◎○∆を、なっていないものには×を任意でつけてもらった。

(2) 日本語学習者への自己評価による can-do リストの妥当性の検証については、学期開始期と学期終了期に各レベルの日本語学習者に対してオンラインで、日本語による Can-do 記述文（英語・中国語の翻訳付）を読んで、「十分できる」「70～80%できる」「50%できる」「あまりできない」「ぜんぜんできない」の 5 段階評価してもらい、それを「できる値」として統計処理を行った。学期開始期と学期終了期の有意差をみるために、t 検定を行った。困難度順に並んでいるかどうかを検証す

るために、ラッシュモデルを用いて検証した。

(3) 初級から超級までの日本語学習者の作文・口頭表現の成果物または音声を収集し、それらを技能別担当者で吟味し、他の教員にも評価してもらい、妥当なサンプルモデルを抽出した。これらは全て学習者の承諾を得たうえで、ウエブ公開することとした。

４．研究成果

研究成果については、３つの項目別に以下に記す。

(1) 日本語教員への並べ替え調査

AJ Can-do リスト 2014 年試行版の妥当性を検証するため、国内の日本語教員 56 名と海外の日本語教員 42 名、計 98 名に対して同リストの並べ替え調査を行った。その結果、以下のような傾向がみられた。

② 一致度（カッパ係数）の value 値を比較すると、国内教員の回答では 4 技能とも高い一致度を示していたが、海外教員の場合は国内教員に比べて、口頭表現、文章表現、聴解において一致度がやや低い。

③ 4 技能別、レベル別にみると、一致度の数値は異なるものの、レベルによって一致度が低くなる箇所の傾向が似ているように思われる。口頭表現は初級１、初級２、中級１までは一致度が高いが、中上級、上級あたりが低くなっている。文章表現は中級２から上級１までが比較的低くなり、超級になるとまた一致度が高くなる。聴解も初級と超級が高く、中上級が低い。読解はやや国内の中上級、上級１の一致度が低くなっているが、海外教員の読解回答は他の技能に比べて、各レベルの一致

	国内教員	海外教員
口頭表現	0.8344	0.6526
文章表現	0.8295	0.6972
聴解	0.8641	0.6883
読解	0.8227	0.8117
0.61～0.80＝かなりの一致度		
0.81～　＝高い一致度		

【表 1】一致度の検定（value 値）

が概ね同値となっている。

以上のことから、国内教員のほうが海外教員に比べて一致度の数値がやや高いといえる（【表 1】参照）。これは本学の日本語教員の回答も含まれていることが影響しているかもしれない。また、どの技能も初級から中級前半レベルと超級レベルについては概ね一致度が高いが、中上級、上級１あたりは判定が難しいことが窺える。今後は、一致度の低かった Can-do 項目にある記述文に着目し、より識別度を上げるための方策を考慮していくことが求められよう。

(2) 日本語学習者への自己評価

調査の目的は以下の 4 点である。

1)学期開始時と学期終了時のできる値を比較して、伸びが見られるか。

2)各レベル別の傾向及び特徴がみられるか。

3)各技能別の傾向及び特徴がみられるか。

4)JSL(日本国内の日本語学習者)と JFL(海外の日本語学習者）とで、学期開始時と学期終了時のできる値を比較して、伸びに違いがみられるか。

調査方法については、【表２】のとおりである。

	JSL	JFL
対象	本学全学日本語プログラム受講学生308名（初級～超級）	中国赴日本国留学生予備学校博士班学生83名
国・地域	中国・韓国・イタリア・ロシアなど60カ国・地域	中国
年齢	20～30歳代	25～35歳前後
実施時期	2014年秋学期（10～2月）	2015年5月（初級終了期）
	2015年春学期（4～7月）	2015年7月（中級終了期）
実施方法	各学期開始期と終了期に	初級終了期と中級終了期に
	Can-do目標78項目を自己評価	Can-do目標78項目を自己評価
	オンラインで5段階評定で回答	オンラインで5段階評定で回答

【表 2】調査対象者と実施方法

表２の学生に対して、Can-do リスト 2014 年試行版の初級～超級まで 8 レベルの Can-do 目標(Cds)78 項目（技能別には、文章表現 10 項目、口頭表現[独話 14 項目、対話 21 項目]、読解 15 項目、聴解 18 項目で、計 78 項目）について、5 段階評定で、学習者に自己評価をオンラインで行った。オンラインの Can-do 記述文は、技能別に項目をランダムにし、日本語・英語・中国語のいずれかを選択して回答してもらった。

調査 1：日本国内の学習者を対象とした Can-do 自己評価結果とその分析

調査１では、表２の JSL に記載されている本学全学日本語プログラム受講学生による自己評価を実施した。その結果、学期開始期と学期終了期を比較したところ、すべての技能・レベルで、学期終了期のほうができる値

平均が高かった。ここでは、産出系の文章表現と口頭表現に初級・中級・上級レベルの学習者のできる値の平均値を例として、考察する。

各レベルの学習者が初級から超級までのCan-do 記述文をみて、回答したできる値の平均値を表したものである。初級学習者の回答平均と中級・上級学習者のグラフラインがきれいに段階別に傾斜をなしていることがわかる。口頭表現：独話の場合は、初級学習者の回答に、中級 1、中上級のほうがその下のレベルよりもできる値の高いものがみられた。中級学習者では、中級 2-2 よりも中上級のほうが高い値となっている。以下がその記述文である。

中級 2-2：制度やものごとの仕組みについてわかりやすく説明できる

中上級 1：事前に準備すれば、社会的、文化的なテーマについて発表（５分程度）できる

これは「事前に準備すれば」という文言が中級１の「事前に準備すれば身近な事柄について、簡単な発表（３分程度）ができる」と似ており、簡単だと認識されたからかもしれない。加えて、同時期の中級クラスではすでに社会文化的なテーマの発表を行っていたことも関係しているのでははないかと思われる。口頭表現の対話の場合、初級学習者は中級 1-2「簡単な依頼や要求ができる」のほうが初級 2-1「予測できる日常的な状況であれば、基本的な語や表現を使って短い会話が続けられる」よりもできる値平均が高いという結果であった。これは、中級 1-2 の「簡単な」という語が「短い会話が続けられる」よりも易しいと判断された可能性もある。また、中級・上級学習者においては、中上級 1-3「依頼・詫び・アポイントメントをとる、など適切な機能会話表現を使って、先生や友達に概ね話すことができる」が、中上級 1-1「やや専門性のあるテーマの発表を聞いて質疑応答ができる」、中上級 1-2「やや専門性のあるテーマについて質問内容をあらかじめ作ってインタビューや議論ができる」よりも高かった。同様に、上級１の４項目のうち、上級 1-3「相手に応じて、交渉を含めた依頼・詫び・アポイントメントをとるなど適切な機能会話表現を使って会話することができる」という機能会話に関する記述文のできる値平均がほかの上級 1-1、1-2、1-4 の項目よりも高くなっており、中上級対話の記述文と共通した点がみられた。これは、機能会話、インタビュー、ディスカッションといった活動による違いが、できる値平均の結果に影響しているとも考えられ、同レベル項目内での口頭表現の対話の活動タイプと難易度の相対をどのように考えればよいか、そもそもアカデミック日本語における口頭表現能力とは何かといったことなども含めた、能力記述の難しさを感じさせる結果となった。

調査 2：中国長春の学習者を対象としたCan-do 自己評価結果と考察結果

調査２の分析にあたり、

① ２回中級開始時と終了時の評価値の間に異なりが見られるか

② 中国語母語話者である対象学生の自己評価はどのような特徴が見られるか

の２点を中心とすることとした

分析の結果、中国における赴日本国留学生予備学校の博士班の学習者の中級開始期と終了期に実施したCan-do目標78項目のうち、66 項目の自己評価値について、開始期と比べ、終了期の伸びが有意であることがわかった。つまり、Can-do 目標は概ね日本語の技能面の伸びを示すことができるものであると言えよう

ラッシュモデルの適用手続きに従い、読解の各Can-do目標の難度を算出した(静2007)。その結果、項目の難度は、以下の順と示された。

初級１＜中級１＜初級２＜中級２＜中上級＜上級１＜上級２＜超級

この結果から、初級２と中級１の Can-do 目標の記述の難度に修正すべき点があると考えられる。以上、統計処理及びラッシュモデルによる解析により、Can-do 記述文の問題点が抽出され、修正が検討された。そして、2017 年３月に「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-so リスト（AJ Can-do リスト）」が以下にウエブ公開されるに至った。

http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/development/ajcan-do/index.html

(3) AJ Can-do リストに基づいた教材を開発した。それを使用して日本語運用能力を高めるためのタスク型教材にしたこ

とによる効果は何かについて、学習者の発話データを文字化して形態素解析し、その効果が実証された。

＜参考文献＞
静哲人（2007）『基礎から深く理解するラッシュモデリング―項目応答理論とは似て非なる測定のパラダイム』関西大学出版部
鈴木美加他（2012）「日本語学習における目標記述をめぐってー全学日本語プログラムの Can-do リスト作成に向けてー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38 号 155-166
鈴木美加・藤森弘子（2014）「Can-do リスト開発プロセスにおける学習者の自己評価とその分析」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40 号　53-68
European Framework of Reference for Languages』国際交流基金
Council of Europe(2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 伊集院郁子「アカデミック・ライティング能力の獲得を目指した Can-do リストの策定」シドニー日本語教育国際研究大会 2014 予稿集、査読有 2014
② 鈴木美加・藤森弘子「Can-do リスト開発プロセスにおける学習者の自己評価とその分析」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40 号, 2014,　53-68
③ 鈴木美加・藤森弘子「アカデミック日本語 can-do 記述文を用いた学習者の自己評価の分析－日本語レベルと技能の関連性からー」「第 18 回ヨーロッパ日本語教育論文集」ヨーロッパ日本語教師会 査読有 2015, 287-288
④ 藤森弘子・前田真紀「can-do 行動目標に基づいたタスク型初級教材の開発と実践－タスク遂行のプロセスに焦点をあてて－」『日本語教育方法会誌』Vol.22, No.1, 2015, 102-103
⑤ 藤森弘子「アカデミック日本語教育における対話タスクの連続性」「第 19 回ヨーロッパ日本語教育論文集」ヨーロッパ日本語教師会　査読有 2016
⑥ 藤森弘子「タスク型初級日本語教材の開発とその特徴―学習者発話の形態素解析結果から―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』42 号 2016, 13-28
⑦ 藤森弘子「交流型授業における会話構築過程の比較分析―初級クラスと中級クラスの実践事例から―」『Bali-ICJLE2016 日本語教育国際大会予稿集』査読有 2016
⑧ 藤森弘子「タスクは発話を促進するのか―タスク型教科書と文型中心教科書を使った学習者の発話産出の比較から―」『2015 年度メキシコ日本語教師会紀要』メキシコ日本語教師会　査読有 2016, 90-100
⑨ 藤森弘子「国内外の日本語教員による「Can-do 評価」の比較分析」『第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』香港日本語教育研究会 査読有 2016
⑩ 藤森弘子・鈴木美加「国内外の日本語学習者による Can-do 自己評価の分析」『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証』平成 26－28 年度科研費基盤研究（B）成果報告書（2017）48－69
⑪ 藤森弘子「初級教材『大学の日本語初級ともだち』の開発―その理念と実践―」『韓国日語教育学会第 31 回国際学術大会予稿集』2017, 131-135
⑫ 吉岡慶子「ヨーロッパの日本語教育における CEFR 事情」『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証―成果報告書(2017)』2017, 1-13

〔学会発表〕（計９件）

① 鈴木美加・藤森弘子「アカデミック日本語 can-do 記述文を用いた学習者の自己評価の分析－日本語レベルと技能の関連性からー」第 18 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（スロベニア・リュブリャナ大学）2014
② 藤森弘子・前田真紀「can-do 行動目標に基づいたタスク型初級教材の開発と実践－タスク遂行のプロセスに焦点をあてて－」「第 44 回日本語教育方法研究会春季

大会」（日本・学習院大学）ポスター発表 2015

③ 藤森弘子「アカデミック日本語教育における対話タスクの連続性」第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（フランス・ボルドー　モンテーニュ大学）ポスター発表 2015

④ 藤森弘子「タスクは発話を促進するのか—タスク型教科書と文型中心教科書を使った学習者の発話産出の比較から—」2015 年度メキシコ日本語教師会大会　口頭発表　2016

⑤ 藤森弘子・鈴木美加「国内外の日本語学習者による Can-do 自己評価の分析」『外国語教育における能力指標—CEFR と日本語教育—国際シンポジウム口頭発表』2016

⑥ 藤森弘子「交流型授業における会話構築過程の比較分析—初級クラスと中級クラスの実践事例から—」『Bali-ICJLE2016 日本語教育国際大会口頭発表』2016

⑦ 藤森弘子「国内外の日本語教員による「Can-do 評価」の比較分析」『第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム口頭発表』香港日本語教育研究会, 2016

⑧ 藤森弘子「初級教材『大学の日本語』の開発への応用」『国際シンポジウム「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト」の活用に向けて』東京外国語大学留学生日本語教育センター 2017

⑨ 藤森弘子「初級教材『大学の日本語 初級ともだち』の開発—その理念と実践—」『韓国日語教育学会第 31 回国際学術大会口頭発表 2017

〔図書〕（計 1 件）

① 藤森弘子（研究代表者）『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証平成 26－28 年度科研費基盤研究（B）－成果報告書（2017）－』2017　153 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

藤森　弘子（FUJIMORI, Hiroko）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・教授
研究者番号：50282778

(2)研究分担者

中村　彰（NAKAMURA, Akira）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・准教授
研究者番号：10272618

藤村　知子（FUJIMURA, Tomoko）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・教授
研究者番号：20229040

伊集院　郁子（IJUIN, Ikuko）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・准教授
研究者番号：20436661

芝野　耕司（SHIBANO, Koji）
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：50216024

伊東　祐郎（ITO, Sukero）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・教授
研究者番号：50242227

工藤　嘉名子（KUDO, Kanako）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・准教授
研究者番号：80376813

鈴木　美加（SUZUKI, Mika）
東京外国語大学大学院国際日本学研究院・教授
研究者番号：90226556

(4)研究協力者

吉岡　慶子（YOSHIOKA, Keiko）
ライデン大学地域研究科日本研究専科日本語教育部門長

萬　美保（YOROZU, Miho）
香港大学日本研究学科日本語プログラム専任講師